

---

# 囚人ゲーム

力力

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

囚人ゲーム

### 【Zコード】

Z6537Y

### 【作者名】

力力

### 【あらすじ】

上坂の前に現れる復讐相手。

始まる囚人ゲーム。次々に現れる敵。激化していくゲーム。

上坂は勝ち残ることができるのか？復讐はどうなるのか？

## 第一章 主人公を待つもの

人の気配がない山奥に、黒塗りの自動車が走行していた。

その先頭を走る車の後部座席に、その男はいた。

上坂真一。髪は黒色で、まとまっている。切れ長で大きな目。モデルのような体。人目を引くその外見だが、ところどころにアザがある。連れてこられるときに、争つた後だつた。

手足は縛られており、口はふさがっていた。

舗装されていない山道に車が大きく跳ねる。その振動で、アテルが目を覚ます。

「ん、うううん」

目をゆっくりと開けるアテル。その瞳は漆黒と表現できるような、まっすぐな黒色だった。

「ん、」意識がはつきりしてきた。目を完全に開く。

「んんーーんんーー」

口をふさがれているので、言葉にならない。

運転をしている黒服の男が上坂に気づく。

「気がついたか、上坂真一。静かにしている。もうすぐ目的地に着く。」

状況がまったくつかめない上坂。

どこだここは？ 確か、そうだ。黒服の男がいきなりやつてきて俺を。

23時間前、夜10時。

上坂がいた刑務所の消灯時間。いつもと同じように囚人は牢屋に入れられ、鍵が閉められる。

上坂の牢屋の鍵も閉められた。

「はー今日も疲れた。もう寝るか。」

何事もなっかたように独り言をつぶやき、ベットに倒れこむ。

30分後。上坂はまだおきている。ベットから顔を上げあたりを確

認する。物音ひとつしない。

全員寝たみたいだな。心の中でつぶやく上坂。

上坂は素早く体を起こし、牢屋の右上隅から左こうつてこうつのところの石畳に向かう。

慣れた手際で石畳をはずしていく。石畳がはずれるとそこにはそこが見えない空洞があった。

上坂はそれを満足そうに見つめ、音が立たないよひで石畳を慎重に置く。

空洞からはわずかな風が吹き抜けてくる。外とつながっているようだった。

上坂がやううとしていること、もうお分かりだらう。それは・・・脱獄だった。

いざ穴へと飛び込もうとする上坂だったが、足が止まる。カツーン、カツーン。上坂の耳に聞こえてくる、これは足音。まずい、上坂は反射的に動く。石畳を素早く戻し、ベットにもぐりこむ。

足音は次第に大きくなつてくる。上坂の緊張も高まる。

足音から察するに、だいぶ近くにいる。緊張の中上坂には疑問が浮かぶ。まだ10時35分くらいのはず。巡回は1時間だと行ははずなのに?まさかばれたのか。

さらに緊張が高まる。足音の主はついに上坂の牢屋にまで来た。過ぎる、過ぎる、通り過ぎてくれ。上坂が願う中5秒経過・・・足音がピタリとやんだ。

さらに数秒の沈黙。上坂の緊張が最高潮に、心臓は破裂しそうだった。

後ろからジャラジャラ音がある。何をしているんだ?

振り向こうか、振り向くまいか迷つていてる時、きいと音がする。まるでドアを開けるときのような音だ。

ドアを開ける？まさか、と思い上坂が反射的に振り向いた途端、ハンカチのようなもの口に当てられた。

抵抗するが、意識が薄れていぐ。

くそ、くそ、やつと脱獄ができるつて時に。外に出て復讐をしようつてときに。

上坂が最後に頭に浮かんだのは、刑務所に流れていたあのうわさだつた。

意識は完全になくなり上坂は眠りについた。

そこで記憶は途切れている。

俺は、あのうわさのとおりに、刑務所から連れてこられたのか？上坂が考えていると、車が止まっていた。どうやら田的でとやらこついたようだつた。

後部座席のドアが開けられる。開けたのは運転していた黒服の男。「降りろ。」

黒服の男が短く命令する。

上坂は仕方なく命令に従う。車を降りて上坂が最初に田にしたのはとてつもなく大きな豪邸だつた。

よく敷地の広さを東京ドームで例えられるが、これを東京ドームで例えるとすると、

東京ドームを20個並べた広さに、縦に5個並べたような大豪邸だつた。

ここでカクレンボしたとしても3日かけても見つけられるか分からぬ。

果然と眺めていると、黒服の男が縄を引っ張りながら、豪邸のほうとは別の方角に歩き出す。

ん？縄、見れば縄の先には上坂の首がつながっていた。当然、上坂は黒服の男に引っ張られる。

いつの間に。上坂が思った瞬間、黒服の男は縄を容赦なく引っ張る。

上坂の首が前に引っ張られる。上坂の体が宙に浮いた。体が引きずられる。

「いててて、痛い、痛い。おーストップ、ストップ。止めろー」

上坂が絶叫する。

黒服の男は上坂のほうを見ようともしない。縄を引っ張る力を緩めようともしない。

「痛い痛い、いた、もうやめろー」

上坂は、引っ張られる力を利用し前方倒立回転する。上坂はうまく体勢を整える。

引きずられることなく、黒服の男と同じように歩いていく。黒服の男に追いつき肩を掴み取る。上坂は腕を引き、黒服の男をこちらに振り向かせる。黒服の男の胸倉を掴み取り、怒りと疑問をぶつける。

「てめー、ふざけんなよ。人を物みてーに引きずりやがって。だいたいここはどこなんだよ。何で俺をこんなところに連れてきやがったんだ。もう少しで、もう少しで

上坂はその先を言つことができなかた。上坂の胸の辺りから、高圧電流が流れてきたからだ。

「がつ

思わず倒れこむ上坂。

「ふう

黒服の男が短くため息をつき、上坂の頭をつかみ取る。そして、倒れている上坂の頭を上げ、瞳を覗き込む。

「ふざんけんなよ、くそが。いつぺんに話すんじゃねーよ。質問なら後で聞いてやるよ。

今は黙つてついてくればいいんだよ。」

そういうて上坂の頭を離して、上坂を見下ろす。

「後お前はここに連れてこられた時点で、人じやねー。物だ。覚え

とけ

上坂は顔を上げる。黒服の男と田が合ひつ。黒服の男の田は、人を見ている田ではなかつた。

「くつ

だいぶ楽になつてきた上坂は立ち上がる。

それを見た黒服の男は、何も言わないまま何事もなかつたかのよう

に歩き出す。

縄で引つ張られているので上坂も歩き出す。

ちつ、なんなんだよ、こいつ。何が物だ。馬鹿にしゃがつて。それに俺の体からなんで電流が？

そう思いながらしばらく歩いていると、ヘリコプターがそこにあつた。

黒服の男はヘリコプターの運転席に乗り込み、縄で上坂を後部座席に乗らせる。

ヘリコプターのエンジンがかかる。ゆっくりとあがつていく。黒服の男が話しかけてくる。

「今なら質問に答えてやる。3つまでな。」

上坂は迷うようにためらいながら、疑問を3つぶつける。

「まず、どうして俺がここに連れてこられたんだ。

それに、ここはいつたいどこなんだ。

お前は誰なんだ。

黒服の男は無表情で淡々と答える。

「お前にはあるゲームに参加してもらつため。

ここは、私の雇い人の前田様のお屋敷。

私はただ雇われただけの人間だ。

「ゲームつて何のことだ、それに前田つて」

上坂の言葉が詰まる。黒服の男が銃口を上坂に向けていたからだ。

「質問は3つまでだ」

「ちつ」

上坂は舌打ちする。言えなかつたことを心の中でつぶやく。

前だつて言えば、日本で一番の大富豪つて言われるあの前田か？それに何でヘリコプターなんか。

その答えはすぐに解けた。ヘリコプターから外を見ると、それは迷路だつた。一度入つたら一度と出られないような複雑な迷路。上から見てもまったく分からぬ。

それからしばらくするとヘリコプターは豪邸の前で着陸した。上坂と黒服がヘリコプターを降りる。黒服の男は、

「中に入れ」

とだけ、短く言い豪邸の扉を開けたと中へ入つていく。

上坂はおかしなことにきづく。

「あれ、引っ張られない？」

自分の首を見てみるといつの間にか繩が外れていた。

「いつの間に。」

上坂はゆっくりと歩いていき、扉の前に立つ。

上坂は悟つていた。この中に入つたらもう後戻りができないこと。

黒服の男が言つていたゲームが命にかかること。そして、復讐を果たすためにはこの中に入らなければいけないこと。

上坂は意を決して扉に手をかける。一度大きく息を吸い込み手に力を込める。

上坂は中へと入つていく。

「囚人ゲーム」が始まろうとしている。

## 第二章 囚人ゲーム開始！！

手に力を込める。扉がゆっくりとあいていく。

上坂の目にまばゆい光が差し込む。突然の光に目がくらむ。光に慣れた目をゆっくりと開ける。

上坂は絶句する。

「・・・すげえ。」

ようやく搾り出した言葉がこれだ。上坂の目に映るのは、当然のごとく豪邸の中身。

当たり前にあるシャンデリア、大理石のテーブル、見たこともないような豪華な料理。

いつていつたらきりがない。とにかくスケールが違う。その中にいる無数の人々。豪邸にまったく似合わない風貌をしていた人々。

質素な服を着こなし、料理にも手をつけず、険しい顔をしている。緊張しているのか、ぴりぴりしているようだ。

上坂の横から誰かが近づいてくる。見ればさつきの黒服の男。

「上坂、これを着ろ。」

黒服の男から渡されたのは質素な服だった。

「もうじき、前田様からゲームの説明がある。さつさと用意をしろ。」

「おい、いい加減に教えてくれ。ゲームってのは言つたい何なんだ？」

黒服の男がため息をする。

「ゲームというのは囚人だけで行われるゲーム、いわば囚人ゲームだ。」

「囚人だけに行われるゲーム？」

もう用は済んだという風に、黒服の男がさつさと立ち去つていく。

「お、おい待て。」

黒服の男は、上坂の呼びかけを無視していつてしまつ。

「ちつ」

近くにいたウエイトレスにトイレの場所を聞く。トイレで着替えをする。着ていた囚人服はどうしようないのでその場に脱ぎ捨てておく。上坂はトイレを後にする。

上坂は目の前の階段を下りて行き、料理のある広場に向かう。その間に何人かの男たちとすれ違う。男たちはこちらをにらんでくる。まるで狂犬だ。

吼えてくる犬の群れの間を裸で通るような感覚だ。だがこの感覚は上坂に恐怖より確信を与えていた。

この感覚間違いない。こいつら全員囚人！

それは上坂がまだ刑務所にいたころと同じ感覚だった。囚人の間を通るたびに、囚人がにらんできた。

居心地の悪い視線。そんな中を上坂が歩いていると、上坂の肩が一人の男とぶつかった。

「あ、悪い。」

上坂が謝る。

ぶつかつた男は何もいわずに去つていった。

「無愛想なやつ。」

囚人とはひときわ違う雰囲気を放つた男だ。

突然天井の光が消えた。それと同時にスポットライトがつけられる。そのスポットライトを浴びながら、一人の男が階段を下りてくる。上坂にはその顔には見覚えがあつた。新聞やテレビで見たことがある。

恐らくこの男は、

「やあ諸君、よく集まつてくれた。私が前田金治だ。」

下りてきた男、いや前田金治が囚人に向かつて話しかけてくる。上坂は背中に寒気を覚えた。

なんだ？前田の声を聴いた瞬間からだの毛が逆立つ。前田とは初対面のはず。体が警告する。

まさか、この男は・・・

「早速だが君たちにはひとつゲームに参加してもらおう。聞いているものもいると思うが、参加してもらおうゲームは囚人ゲームだ。」

囚人たちの間に波紋が広がる。囚人たちが声を上げる。

「ふざけるな。」「俺たちを解放しろ。」などなど。

「しゃべるな」

前田の静止。

「君たちに質問する権利はあるが、しゃべる権利もない。次口を開いたものは死んでもらう。」

前田が死刑宣告をした瞬間、囚人たちの周りを黒服の男たちが取り囲んだ。

黒服の男たちは全員機関銃を持つていた。

囚人たちの口が固く結ばれる。

「結構。続きを話そう。囚人ゲームとは君たち囚人の命をかけたゲームだ。勝者は一人。勝った者には罪をすべて消し、刑務所から釈放してやろう。それだけではない。勝者には1000万円を授けよう。生活の援助金のつもりだ。」

囚人たちに歓喜の声が上がる。

「しかし負けたものには、死んでもらうことになる。」

歓喜の声がやんだ。

「ふざけんな。なん・・・」

どどどどど、銃声が鳴り響く。怒鳴ろうとしていた囚人は後ろの黒服の男に撃たれ絶命した。

前田は何事もなかつたように話を始める。

「君たちにはこれから前にあるこの3つの白い箱から一枚ずつ紙を引いてもらおう。」

そういうつて白い箱を取り出す。

「この箱にはそれぞれ君達が獲得できる、武器・金・アルファベットが入っている。」でわ一人ずつ引いていってもらおう。」

数10分後

上坂が引いたカードは次の3枚。

「武器」は、金=さ、アルファベット=A Bであった。

何だこれ？アルファベットはわかるが、武器と金が意味不明だつた。

「諸君、武器と金はこの場でわかると面白くないので、わからないようにさせてもらつた。諸君はこれからそれぞれのスタート地点へ移動してもらつ。武器と金はそこにおいておく。アルファベットが示すものは、君達の仲間だ。囚人同士でペアを組んでもらう。相手もスタート地点へ行けばわかる。ゲームのルールについてだが、君達には特殊なケータイを渡しておく。そこにルールはすべてのつている。さらにこのゲームをもっと面白くしてくれる特典を多数つけておいた。それには諸君らが自分でできづいてもらつしかない。では以上だ。」

前田は説明を済ませ階段を上り去つていく。

上坂は頭が混乱していた。

ペア？特典？ケータイ？

何がなんだかわからなくなつてきた。顔を上げるとほかの囚人が目に入る。

どの囚人も難しい顔をしていた。上坂と同じように頭が混乱しているのだろう。

周りを囲んでいた黒服の男の一人が前に進み出る。

「これから貴様達を各自スタート地点に連れて行く。乗つてきたヘリコプターに乗り込め。」

上坂を含む囚人達は、ヘリコプターに乗せられ前田家の豪邸を離れていく。

上坂のヘリコプターは5時間ほど飛び、どこかの港へ降り立つた。明かりのない港は暗闇だ。

そんな暗闇の中にひとつの人影が見える。ヘリコプターは上坂を降ろしどこか飛び去つていく。

港に人影が二つ。二つの影の間に4つの箱が置かれている。

一つの影は箱へと向かって行き近づいていく。  
互いの顔が見える距離になるまで近づいた。

相手のほうから声をかけてくる。

「初めまして。僕の名前は伊藤海斗。いとうかいと よろしく。」

海のほうから太陽が昇ってきた。日の出だ。

「・・・俺は上坂真一。」

囚人の命を懸けた囚人ゲームの開始が告げられた。

## 第三章 忍び寄る足音

「上坂真二君だね。 よろしく。」

伊藤は笑みを浮かべる。

「・・・よろしく。」

少し不満そうに答える上坂。

二人は黙り込む。 上坂の目には警戒の色。 そうだろう。 相手は一日前まで囚人だつた男だ。

罪はどうあれ油断ができなかつた。 そんな上坂に対し、 伊藤は笑みを崩さずにニコニコしていた。

上坂にはそれが不服だつた。 二人の間に流れる微妙な雰囲気、 そんな重たい沈黙を破るかのように伊藤が口を開いた。

「真二君、 これからどうしようか?」

「俺を君付けで呼ぶな。」

なんなんだ? コイツ能天氣すぎる。

「これから宿かホテルを探す。 ここがどこだか知つておきたい。 それと・・・」

上坂は目の前においてある4つの箱を見つめる。 この4つの箱には上坂と伊藤の武器と金が入つていて。

上坂はしゃがみこみ、 箱を覗き込む。 4つのはこのうち2つに上坂と書かれていた。

上坂は自分の名前の書かれた箱の2つの中、「金」と書かれた箱を開ける。

そこには札束が一つ入つていた。 上坂はそれを持ち上げる。 量からして枚数は50枚ほどある。

金額は50万円。

伊藤がうらやましそうな声を上げる。

「うわーすごいなあ。 上坂君50万円ゲットだね。」

「お前も自分の箱を開けてみろよ。」

上坂がそう催促したので伊藤は自分の箱のうち「金」とかかれた箱を開ける。

伊藤の動きが止まつた。その目は信じられないものを見るような目だ。

「いくら入つていたんだ？」

「ひぢ、ひぢ、ひぢ、」

伊藤の口が震えている。言葉にならないようだった。

まさか俺よりも何倍もの金額なのか？

「い、伊藤。いくらなんだ。」

伊藤は徐々に落ち着いてきたか  
また信しきれなし顔をしてしまった

金匱要略 卷之三

まさか百万円か？

百四

百川嘲諷集

二段の頸が高遠回転する。

其の頭方進口轉一

金は東藤との合計になる。

俺たちの合計金額は、50万百円？50万百円？ほかのペアの金額

は矢口なしが俺たちに

卷之三

「いや、大丈夫だ。ほかのペアはもつと低い……はず。ポジティ

方に、ボジテイ方にいこう。

五百三十一

そんな上場を見て伊藤が心配そうに声をかける

あの、 真一君大丈夫？ 顔が青いよ。

「あ、ああ大丈夫だ。」

上坂はふらふらと立ち上がる。

そうまだまだ武器がある。武器によつては挽回できる。

「伊藤武器だ、武器をチェックするんだ。」

伊藤は少し戸惑いながらも、もつひとつずつ箱、「武器」とかかれた箱を開く。

上坂も自分の箱を開ける。武器は白い布に包まれていた。どんな武器なのか判断ができない。

その白い布を取ろうとしたとき、伊藤が大きな声を上げた。

「ああ――。見てみて上坂君。ほらこれこれ。」

「俺を君付けするな。」

突っ込みを入れながら伊藤の「武器」を確認をする。

周りが暗く、「武器」も黒かつたのではっきりとはわからないが形からしてそれは拳銃だった。

「やつたな、伊藤。拳銃はなかなかいい武器のはずだ。」

「うん。」

二人はハイタッチを交わす。パンという音が鳴る。上坂はその音にはつとしたように手を引っ込める。

こんなやつとハイタッチをしてしまった。こんな能天気なやつと。こいつと一緒にいると調子が狂う。なんていつかペースに引き込まれるみたいな。

「上坂君の武器は何だつたの?」

「ああ、俺の武器は・・・」

上坂は改めて自分の箱に向き白い布を取る。

「なつ」

今度は上坂の動きが止まつた。伊藤は上坂の箱を覗く。フリーズ。伊藤の動きが止まつた。

上坂の武器は暗闇の中でもはつきりとわかる白色。その独特な形は日本人なら誰でも知つていいものだつた。下部は細く、上部は広がるようにならんでいる。やう上坂の武器は・・・

「ハ、ハリセン?」

思わず上坂の声が裏返る。

伊藤は何も言わない。

「ハリセン・・・だよな?」

「…」

上坂の質問に伊藤が答える。

「う、うん。」

上坂は息を吸い込む、大声で叫ぶ。

「最悪だー。」

金だけじゃねない、・・・武器もBADスタートだった。

上坂は思わず泣きたくなる。

「ま、まあ。大丈夫だよ。銃もあるし、お金もある。ほら、ポジティブに、ポジティブに。」

それさつき俺も思った。俺の頭はこんな能天気なやつと同じことを考えていたのか。

「真一君?」

いつまでも落ち込んでいられない。上坂はそう思つて立ち上がる。

「敵がないとも限らないし、早く寝床を探すか。君付けで呼ぶな。

」

上坂は皿ざとく突つ込みを入れる。

元気を少し取り戻した上坂を見て伊藤は安心したのか、元気よく答える。

「うん、行こう。」

上坂は伊藤と共に港を出て行く。

上坂がいた港の第一倉庫に2つの人影。その視線は上坂たちのほうに向けられていた。

そのうちの一人が口を開く。

「最初のターゲットはあいつらにしてよーぜ、弟よ。」

もう一人が答える。

「ああ、そうしよーぜ。兄ちゃん。」

上坂たちに死神の釜が振り下ろされようとしていた。

## プロローグ ある噂（前書き）

事情がありプロローグが4話目になっています。  
物語の始まりなので、最初に読んでください。

## プロローグ ある噂

ある刑務所に一つのうわさが流れていた。

掃除をしている囚人たちが手を止めて、うわさについて話を始める。

「おい、聞いたか？また一人いなくなつたって。」

「ああ、聞いた聞いた。あれだろ？1ヶ月ごとに重罪を犯したやつが消えるっていう。」

「そうそう。」

「で、今度は誰がいなくなつたんだ？」

「ほら、おいつ。上坂だよ。」

「あいつか。・・・虚言だろ。」

「ああ。」

囚人たちがそこで話をやめて再び掃除に取り掛かる。

これは囚人たちで行われる命がけのゲーム、囚人ゲームの序章だった。

## 第四章 凶悪すぎる兄弟

上坂と伊藤が港を出て20分後。

「それにしても思ったより早く寝床が見つかってよかつたね。」

「ああ。 そうだな。」

「これからどうじょうか?」

「お前そりゃつかりだな。 少しは自分で考えろよな。」

「えー。 そんなこといわれても。」

伊藤は不満そうに言つ。

「僕考えるのは苦手なんだ。 それに比べて上坂君つてすいぐ頭よさそうだし。」

上坂はため息をつく。

「何でお前はそう能天氣なんだ? 後、俺を君付けで呼ぶな。」

上坂は忌々しそうに言つ。

伊藤は上坂の言葉が聞こえなかつたかのよつて上坂の言葉を無視し、ポケットからケータイを取り出した。

「そのケータイは、」

「そう、このケータイね僕を運んだ黒服の男の人気が置いていつてんだ。」

それは前田の持つていたケータイと同じものだつた。

「貸せ、」

上坂は乱暴にそれを取り上げた。

「あー。 それまだ僕も中を見ていなかつたのに。」

伊藤の言葉を無視して上坂はケータイを操作する。しばらぐのあいだぴぽぱとおどがしていただが、やがてその音がやんだ。

「なになに、何かわかつたの?」

「これは見た目や機能は普通のケータイだ。 お気に入りを開いてみると囚人下ーぬについてにサイトがあつたんだ。 ルールが書かれてる。」

「えつ、僕にもルールを見せて。」

ケータイを覗き込もうとする伊藤に上坂は体を挟み込ませて阻止する。

「まで、これにはGPS機能がついている。まず現在の俺達のいる場所を知るのが先だ。」

伊藤は何かを言おうとしたがやがて納得したように黙り込む。

上坂は再びケータイを操作する。

「出たぞ。ここは・・・石川県七尾市。」

「石川県七尾市。」

伊藤は上坂の言葉を復唱する。

「あまり聞いたことがない場所だね。」

「ああ、石川県なんてあまり聞かない県だしな。」

伊藤はその話題には興味がないのか話を先に進めようとすると。

「上坂君、ここがどこかはもうわかったから囚人ゲームについての情報を早く。」

「ああ、そうだな。・・・君つけんなよ。」

上坂はケータイを操作し再び囚人ゲームについてのサイトを開く。

上坂は注意深く読み上げていく。

「ルール1、ペア同士が200m以上はなれた場合両者をその時点でゲーム失格とする。

ルール2、1週間のうちに最低でも1ペア倒さなければゲーム失格とする。

ルール3、戦闘中にペアが死んだ場合残されたもう一人はそのまま戦闘を続ける。相手のうち一人が倒されたときそこで強制的に戦闘終了となる。戦いを続けようとした場合両者を失格とする。両者はお互いの合意があれば新たにペアとなることができる。そこでペアを作らなかつたとき、両者はその後一人で戦う。

ルール4、ペアを殺すことは禁ずる。

ルール5、金は共同で使ふことは許可するが、武器は所有者しか使ふことはできない。別のものが使おうとした場合そのものは失格

とする。しかし、所有者が死亡した場合武器は死んでから一番最初に触つたものが新たな所有者となる。」

上坂はルールを一通り読み上げた。

何なんだこのルールは？ルール4、なぜこれだけ「禁ずる」なんだ？他は失格となっているのに。

前田は言っていた。ゲームの負けは死を意味すると。失格となつたものは恐らく死を意味するんだろう。

だけど、「禁ずる」はどうなるんだ？ペアを殺したら失格になるのか？それとも何か別のことか・・上坂はチラッと伊藤のほうを見る。「わー、すごいルールだねー。」みたいな顔をするとと思っていた上坂の予想に反し、伊藤は冷たい目をしていた。

まるで何かを観察するような目。普段の能天気な伊藤からは考えることはできない、真剣な目つきだった。伊藤が上坂の視線に気づく。「わー、すごいルールだねー。」

上坂の数秒前の反応をした。伊藤の変化はあまりにも大きく不自然で別人を錯覚させた。

「そうだな。」

短い返事。さつきの伊藤は一体？

ホテルの照明が突然消えた。一瞬にして視界が暗闇になる。

「なんだ？」

「あれ照明が？」

伊藤の間の抜けた言葉の直後、きやーーー。

女性の悲鳴が聞こえた。悲鳴は男女ともに、数秒のインターバルもなく次々と聞こえてくる。

上坂は窓へと駆け寄る。窓を開け身を乗り出す。首を上下に動かし状況を確認する。

伊藤が部屋の扉を開けようとしているのが見えた。上坂は窓から身を引く。

「やめる、扉を開けるな。」

「え？ なんで？」

「さつき他の階を確認したんだが、明かりがついていた。照明が消えたのは俺達の部屋・・・いや恐らくはこの階全体だろ?」

「何で僕達の階だけ?」

伊藤の能天氣ぶりに苛立ちを覚える。ここまでイってんだから気づけよ。

「敵だ。そう考えるのが自然だろ? さつき聞こえた悲鳴はこの階のほかの客のものだろ?」

「あ、そうか。」

なるほど、つといた顔をする伊藤。ほんとにこいつは。

「気をつけるよ、伊藤。こいつらはかなり凶悪なやつらだ。人を容赦なく見境なくも殺すような、な。」

「か、上坂君。僕達はこれからどうすればいいの?」

伊藤は泣きそうな声で言つ。そんなこと俺に言われても困る。

「やつらはいざれこの部屋にやつてくる。それがわかっているんだからやつらを返り討ちにすればいい。伊藤泣くな。静かにするんだ。俺達がこの部屋にいることをやつらに悟られてはいけない。俺はお前の銃を使うことはできない。俺の武器はハリセン。役にはたたない。いいか、このゲームはお前にかかっているんだ。」

「う、うん。」

上坂の言葉で伊藤は覚悟を決めたようだつた。

上坂と伊藤はベットの陰に隠れ、扉が見える位置に待機する。せめて来た囚人達を返り討ちにするためだ。

客の断末魔はいまだに続いている。

客の悲鳴を聞いた人が部屋から廊下に出て、囚人の餌食に遭つ。それの繰り返しだつた。

悲鳴の声がだんだんと大きくなつていった。

やつらが近づいてきている証拠だ。上坂の緊張が高まる。

かなきり声の音源が隣の部屋まで来た。

いよいよ来るか。上坂と伊藤がそれぞれの武器を持ち上げ身構える。

5分後、10分後

扉が開く様子はない。

上坂が恐る恐る口を開く。

「去つた・・・のか」

「・・・そうみたいだね。」

二人は安堵のため息をつく。

上坂は扉から向きを変え窓の方へと向く。

上坂達の部屋の窓は月明かりが差し込む角度となっている。

今は夜で満月だ。まぶしいくらいの月明かりが差し込んでいる。

上坂は妙なことに気づいた。

月明かりに妙な形をした黒い模様が差し込んでいた。

上坂はその黒い模様の正体に気づき恐る恐る窓の外のほうへと田を行く。

上坂は絶句した。伊藤が上坂の異変に気づく。伊藤も窓のほうへと目をむく。

月明かりに差し込む黒い模様、それは二つの人影だった。  
囚人たちは上坂が開けた窓の取っ手にぶら下がっている。

二人のうち少し背の高いほうが話しかけてきた。

「こんばんわー。一応確認するけどあんたら囚人だよねー?まーどつちにしても死んでもらうけどね。」

上坂は絶体絶命だった。



## 第五章 隠された特典？

二人の囚人は窓から部屋へと侵入する。月明かりに照らされて二人の囚人の右腕上腕部に刺青があるのを上坂は見逃さなかつた。刺青に描かれているのは蛇と鎌。鎌の先端に蛇の首がかかっている。あれは死の象徴の刺青。普段は捕食する側の蛇に鎌をかけて殺す残酷性の象徴だ。

上坂はその刺青をしている囚人に見覚えがあつた。

「お前たちは、もしかして俱利伽羅兄弟・・・なのか。」

囚人たちはぞつとするような笑みを浮かべさも嬉しそうに答える。

「俺たちのことを知つていいのかー？。嬉しいねー。俺たちのことを知つていることは俺たちの罪も知つていいんだよな？」

上坂はたじろぎながらも答える。

「ああ、・・・お前たちのことはニュースで見たからな。罪もない人を50人も殺した凶悪連続殺人兄弟俱利伽羅。」

上坂の言葉を聴き、俱利伽羅・兄の口元の端がさらに2cm上がった。

「いいね、いいねー。なあ、お前らさー知つてるか？入つてのはただ殺してもつまんねーんだぜ。」

殺す直前までターゲットに恐怖を与えるんだ。そうしてターゲットの顔が恐怖にゆがんでいるときに、一思いにはやらずに、じっくりなぶるようやるんだ。恐怖と交わってターゲットの悲鳴が鈴の音のよう聞こえるんだぜー。」

ぞくつ。上坂の背筋に悪寒が走る。

こいつら正気じやねー。もう人手すらない。・・・こいつらは化けモンだ。

俱利伽羅・弟が待ちきれないといったような顔で声を上げる。

「兄ちゃん早く殺さうよー。こいつらの首から血が噴出すところを見たいよー。」

上坂は心中で猛烈に突っ込む。

「おーい、お前かわいらしい声で何どんでもないこと望んでんだよー。」

俱利伽羅・兄がなだめるように言ひ。

「ああ、ああ。 そうだな、弟よ。早くこいつらの首を刎ねよー。」

俱利伽羅兄弟はそれぞれの武器を取り出した。

俱利伽羅兄は等身大の鎌だった。俱利伽羅弟はブーメランだ。そのブーメランは殺傷能力を上げるために刃がついている。しかもあの形は飛ばした後に一直線に飛んで行きそのまままっすぐに戻つてくるタイプのブーメランだった。

上坂は瞬時に考える。

どうする？ここから逃げようにも扉はふさがっているし。窓にもやつらがいる。どうすれば逃げられる？

俱利伽羅・兄が上坂の考えを見抜いたかのように言ひ。

「おーおー、まさかどうやつたら逃げられるなんて考えてんじゃじやーねーよなー？あきらめなー。」

俺らに目をつけられた時点でお前らはもうすでに終わりなんだよー。俺らに目をつけられた時点でお前らはもうすでに終わりなんだよー。覚悟を決めるこつたなー。

俺らに殺される覚悟をよー。」

そういうと同時に俱利伽羅兄弟は上坂たちめがけてダッシュ。

俱利伽羅・兄は上坂の首を刈るため。俱利伽羅・弟は伊藤の首を薙ぐ為。己の欲望を満たすためにただ走る。

上坂がとつさに叫ぶ。

「伊藤ー。今だ、撃て。」

伊藤はすばやく反応した。懐に隠し持つていた銃を取り出し俱利伽羅兄弟に向けて発砲。

ぱんぱん、ぱん。俱利伽羅兄弟に向かつて銃弾が飛んでいく。

俱利伽羅兄弟はすんでのところで銃弾を回避。俱利伽羅兄弟はそれぞれ別々の方向に飛び身を隠す。

こいつらただの囚人じゃねー。慣れてやがる。

俱利伽羅・兄が身を隠しながら得意そうにいづ。

「ひやははは。なめんなよ。俺たちは武装した警察から2週間逃げ延びていたんだぜー。不意打ちくらいじやー殺られねーよ。」

「ひひひひ。」

弟の君の悪い薄ら笑いが響く。

「くそつ。今のうちだ、伊藤逃げるぞ。」

上坂は伊藤の手を取り扉の元へ駆け寄ろうとする。だが一向に進もうとはしなかった。

「おい、どうしたんだよ伊藤。」

上坂が苛立ちをぶつける。

「駄目だよ。上坂君。今外に出ればさらに犠牲者が出る。」  
「けりをつけないと。」

伊藤の声には恐怖が感じられなかつた。その声には強い決心を感じられた。

上坂はあきらめた。普段能天気な伊藤が他人のことを心配しきりまで言つてゐる。上坂が逃げるわけにはいかなかつた。

「よし、やるか。」

「うん。」

「・・・君つけんなよ。」

俱利伽羅・兄が君の悪い声で話しかけてくる。

「ひやは、もう言い残すことはないのか。そろそろ行くぜー。」

上坂は自分の武器ハリセンを取り出す。

今は時間を稼がないと。

「おい、お前らしいのか？もうすぐ警察が来るぞ。あんだけ大騒ぎしたんだ。ほかの人も気づいているはづだからな。」

俱利伽羅・兄は小ばかにしたような口調で、

「お前ケータイを見てねーのかー？」

「どうということだ。？」

「俺たちが起こしたことはすべて前田がもみ消してくれるんだぜー。イヤー金もちはすげーよなー。」

そうだったのか。道理でこんな大規模にゲームを行ははずだ。

「それよりいいのか？お前ら首が飛ぶぜ？」  
？？どういうことだ？

そのとき伊藤が叫んだ。

「上坂君危ない。」

伊藤が上坂を跳ね飛ばす。

さつきそこまで上坂の首があつた場所にブーメランの刃が通つた。

「あー惜しいなー。」

俱利伽羅・弟が残念そうにいう。俱利伽羅。弟が上坂のすぐ後ろにまで回りこんでいた。

「くそ。」

伊藤が俱利伽羅・弟に向けて発砲する。

俱利伽羅・弟はすばやく身を隠す。

上坂は心の中で納得する。

道理でさつきから俱利伽羅・弟の声がしなかつたはずだ。俱利伽羅・兄もやけに話を延ばすような言い方だつた。

だが疑問がひとつ残つた。

「なぜ俺を狙つたんだ？拳銃を持つている伊藤を倒したほうがその後もやりやすいのに。」

珍しく俱利伽羅・弟が答えた。

「俺たちは弱いやつから狙う主義なのさ。武器がハリセンなんてそりゃー雑魚だろーが。」

「？？どうして俺の武器がわかつたんだ？」

ひやははは。俱利伽羅・兄の笑い声が鳴り響く。

「本当にケータイを見てねーんだなー。ケータイにはレーダー機能がついてんだよ。半径500以内にゲーム参加者の囚人がいると、反応して点滅するようになつてんだよー。さらあに、半径100m以内になると相手の名前と所持している武器がわかるようになつてんだなーこれが。」

なつ。そうだつたのか。だから俺たちの武器や居場所がわかつたのか。

俱利伽羅・兄が身を乗り出し、上坂の首を駆るために鎌を横に一線に振る。

上坂はそれをすんでのところでかわす。

伊藤が俱利伽羅・兄に向かつて発砲。それをすばやくかわされる。俱利伽羅兄弟は障害物をうまく使い伊藤の銃弾をかわしながら上坂たちを追い詰めていった。

こいつら本当に囚人か？そいつらの軍人くらいに強いんじゃねーか。

「くそ。」

上坂は伊藤と背中を張り合わせた状態になる。

俱利伽羅兄弟はベットやソファなどの障害物の間を移動し伊藤に狙いをつけさせない。

伊藤は銃は素人なのだろう。その上に動き回れたら銃弾が当たるわけがなかつた。

「口口口口、上坂の足に何かが当たつた。ワインだ。ワインが敷き詰められた戸棚がわれそこから転がってきたのだろう。」

上坂はそのワインを数秒見詰めた後、ハツと何かに気づいたように顔を上げる。

「伊藤俺にいい考えがある。耳を貸せ。」

上坂は伊藤になにやら耳打ちをする。

「いいな、俺の言つとおりにやるんだぞ。」

「うん。」

上坂は俱利伽羅・兄にむかつて走つた。伊藤は銃を発砲し俱利伽羅・弟に向かつて発砲しけん制をする。

俱利伽羅・兄が上坂に向かつて鎌を振り上げる。

上坂はその鎌をかわし鎌を足で止め、手を俱利伽羅・兄の手に添える形で鎌をつかみ鎌の動きを完全に封じる。

「ちつ。離せよ一枚目一。さつさと俺らに殺されちまえよー。」

「冗談言つんじゃねーよ。蛇やろー。」

数秒間にらみ合つ一人。

そのとき、どかつ壁に何かがぶつかる音がした。上坂は音のしたほ

うを見る。

伊藤が倒れていた。気を失っているようだった。

俱利伽羅・弟は伊藤の一瞬の隙を突き胸元を思い切り蹴り上げたようだつた。

「伊藤。」

上坂が叫ぶ。

俱利伽羅・弟が気味の悪い笑みを浮かべ上坂の体をじっくり見る。蛇がその細い舌を使いじっくり獲物をなめるような目だつた。

俱利伽羅・弟が歓喜の声を上げる。

「ひやははは。今だ弟よ殺れ。殺すんだ。」

俱利伽羅・弟がゆっくりと上坂に近づいてくる。

上坂はかまを固定していて動けない。

俱利伽羅・弟が手を伸ばせば届く距離までに近づく。上坂にトドメをさすためブームランを振り上げる。

「ひやははは。」

「ひひひひひ。」

俱利伽羅兄弟が一斉に笑い出す。俱利伽羅・弟が別れの言葉を告げる。だがその別れの言葉は、悲しみの感情は一切なく、聞いたものに恐怖を覚えさせるような低くぞつとするような声だつた。

「じゃあーな。」

上坂めがけてブームランを振り下ろした。

刹那。上坂は瞬時に行動。

鎌を固定していた足をはずし俱利伽羅・兄との力の均衡を崩す。俱利伽羅・兄がバランスをくずした。

上坂はその隙をつき、体を横に倒しその場から飛びのきブームランを回避する。

俱利伽羅・弟は標的が上坂から自分の兄に代わりブームランをとつさに止めた。

上坂は倒れこみながら転がっていたワインと立方体の物を手に取る。上坂は叫ぶ。

「伊藤、今だ、起きろ。」

伊藤が上坂の言葉に反応し起き上がる。

そう、伊藤は気絶したフリをしていただけだったのだ。弟に蹴られたのもすべて演技だった。

上坂は伊藤に立方体のものを投げ渡す。伊藤はそれを受け取り、中から細長いものを取り出しそれを箱にこすり付けて発火させる。伊藤が持つて来るものはマッチだった。

上坂は手に取ったワインを俱利伽羅兄弟にぶつける。

俱利伽羅兄弟はかわす暇もなくお酒まみれになる。

復和伽羅兄弟は上坂たちが何をしよ、としているのかに気がつき恐怖の色をにじませた。

「ֆան, ֆան, ֆան—。」

維叫かたあすNo

伊藤は聞こえなかつたかのよこは「マチを何のためらいもなく放り投げた。

「 」

俱利伽羅兄弟が再び絶叫。立ち上がりつゝあるにも足元が熱さでね  
ぼつかない。

俱利伽羅兄弟は近くにあつた窓に寄りかかる。熱さに耐え切れず、体制崩しを窓の外から転落した。

ドン。人が落ちた音。鈍い、バットでたたいたような音だった。  
伊藤が不安そうな声を出す。

「あの人たち大丈夫かな。」

「大丈夫だ。ここはそんなに高くない。人がおちてもしにはし

「で、でもまだ火が。」

「それも大丈夫。窓の外を見てみるよ。」

伊藤は窓の外を見てみる。なにやら騒がしい。野次馬が集まっていた。

「火はあいつらが何とかしてくれるだろ?」

「・・・上坂君無責任だね。」

「つむせー。後、君つけんな。それに、」

上坂は意地の悪そーな顔をし、

「火はお前がつけたんだろ?」

「そんなー、ひどいよ上坂君がやれって言つたんじやないか。」

上坂は部屋の扉を開け廊下に出て行く。

「どこ行くの?」

上坂は振り向きながら答える。

「ここから出るんだ。いずれ大騒ぎになる。その前にここを出るんだ。・・・君つけんな。」

上坂はそう言つさつさと出て行く。

伊藤があわてたように言つ。

「待つてよー。」

ホテルを出てから30分後。

上坂と伊藤は山奥にいた。

「しょーがない。今日はここで野宿にするか。」

「そうだね。・・・あ、そういうふうに飛ばさ・・・」

伊藤が思い出したように言つ。

「なんだよ。」

「あの時さ、僕が上坂君つて言つても注意しなかったよね。」

上坂のしばしの黙考。

「あつ、」

思い出した、伊藤が俺を跳ね飛ばしたとき・・・

「上坂君危ない。」つとが言つてつた気がする。  
「ね、ね、いわなつかたよね？」

「・・・」

上坂はしばらく黙り込み、その後

「君、つけんなよ。」

「おそつ。」

伊藤が珍しく突つ込んだとき、

ピピピピ、ピピピピ

電子音が鳴り響いた。音源は上坂のポケットからだ。

上坂はぽっけとを探る。

ピピピピ、ピピピピ

音はひときわ大きくなる。音はケータイから鳴っていた。

上坂と伊藤は瞬時に警戒。

上坂はケータイを開く。そこには何もしていらないのに文字が記されていていた。

「戦闘終了、勝者上坂、伊藤ペア。ボーナスとして100万円を進呈する」

上坂が内容を読み上げる。

上坂と伊藤は黙り込む。

次の瞬間、珍しいことに両者の声がハモッタ。

「何これ？」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6537y/>

---

囚人ゲーム

2011年11月27日18時55分発行